首里杜地区整備基本計画検討委員会（第１回）議事要旨

日時：2021 年 7 月 16 日（金）　14：00～16：00
場所：沖縄県市町村自治会館　２階　大会議室

1. 計画策定の意義について

- 計画策定の意義について、観光視点で地域計画をすすめるようにも読み取れる。地域の暮らしや歴史文化を継承することに主眼を置く必要がある。
- 暮らしと観光の両立など、地域課題の解決に向け関係主体が目標を共有し連携していく。

2. 景観・文化分野について

■施策の表現等について

- 方針（１）「古都首里の歴史的なたたずまいに配慮した景観の創出」の「歴史的なたたずまい」という表現について、首里の家屋は戦後に建てられているため、歴史という言葉にこだわるより、戦後も含めた「いわれのある」道やまちという表現がよいのではないか。

■観光施策の在り方、交通施策との関係について

- 「沖縄観光基本方針」では量から質への転換、ターゲットマーケティング等を方針としている。またレスポンシブルツーリズム（責任ある観光）の考えも出てきている。首里も地域の方々が守りたいと考える景観などの価値を共有し、関心のある人に歩いてもらう前提で整備を考えるべきである。
- 方針（３）「暮らしと観光が両立した住みやすく魅力的なまちづくり」の歩行空間に関する施策は、交通分野と重複する。観光と交通課題解決の検討は分けるべきではないか。
- 観光施策については、景観部会、交通部会両方に関わるので、両部会で議論すべきである。

■首里のまちなみや景観資源等の整備の在り方等について

- マップで整理されているが、道や景観資源、歴史的拠点が相当あるため、その中から選定するとともにその周辺の道路、広場、家並み等を含めた整備が重要になる。
- 首里という地域を考えるうえで、御嶽等の信仰の場がキーワードになると考えられる。
- 首里のまちなみは、戦災で焼失しほとんど残っていない。龍潭通り等の赤瓦修景は、戦後に新たにつくられた世界。古いものを保全しようとしてもそれ自体が残っていないため、現状に合った新たなモデルをつくっていく必要がある。
- 戦前と同じでないにしても、住民の想いや協力のもと、家並みをそろえる必要がある。赤瓦や石垣の整備を奨励するような仕組みづくりが必要。
- 中城御殿跡地整備検討委員会とも連携し、松崎馬場や龍潭周辺など含め首里城と中城御殿を結ぶ一帯のエリアを、歩いて回れるエリアとしてきちんと整備していただきたい。
- 円覚寺についても、今年度から三門の復元整備工事が始まる。また、今後の整備方針についても策定中の円覚寺保存活用計画において検討していく。
- 中城御殿は首里城に関連する重要な視点場でもあるため、周辺地を含めた景観の確保や、拠点施設周辺の高さなど建物規制についても検討していただきたい。

- 首里は湧水が多いが整備されているのは一部で、ほとんどは手つかずの状態である。保存されている樋川（ヒージャー）も蓋をしていることが多いが、樋川が何をする場であったのかが分かるような形の保存が必要。
- 広場が首里杜地区の中にない。水のある場所や文化財的な建物付近は広場化することが重要である。

■検討体制について

- 首里は新たな沖縄観光のあり方を率先して体現するまちづくりをめざしたい。協力委員や関係部局の体制について、県観光振興課だけでなく、他の関連課も加えるべきではないか。部会に含める場合も観光は景観と交通の両部会で考えてほしい。

3. 交通分野の今年度の作業方針・現況整理

- ビッグデータ等の使用に際して、スマートフォン GPS データはサンプルデータであるため首里城入場者数等を用いて拡大係数をチェックすることや民間レンタカープローブは時期によって利用者属性に偏りが出ること等、データの特性を把握して使用すること。
- 渋滞対策について、例えば駐車禁止を駐停車禁止にする等の策も考えられるので、周辺道路の法規制も確認していただきたい。施策を検討するうえでは、問題の構造がどうなっているのかを整理したうえで検討する必要がある。
- データを分析すると那覇は旅行の最後の工程になっている。このため、レンタカーを返却してから首里を訪れる観光スタイルの提案など、交通を交通の枠組みの中だけで考えるのではなく、他の施策の中で解決することも想定しておく必要がある。

4. 歴史まちづくり協議会（仮称）の構成について

- 歴史まちづくり法に基づく法定協議会の可能性についても、本委員会で今後、議論していきたい。
- 本計画は 10 年間だが、まちづくりと考えるとき、緑や湧水等、長期的視野で考えるべき課題もある。長期的視野で議論できる仕組み、座組を考慮してもらいたい。

以上